

ネガティブ・ケイパビリティ尺度の開発と妥当化

玉木 賢太郎¹, 伊里 綾子^{2,3}, 山田 真希子^{1,3,4 *}

¹量子科学技術研究開発機構 量子生命科学研究所 量子生命システムグループ

²埼玉学園大学 人間学部 心理学科 ³量子科学技術研究開発機構 量子医科学研究所 脳機能イメージングセンター

⁴千葉大学 大学院融合理工学府

Development and validate of the Negative Capability Scale

Kentaro Tamaki¹, Ayako Isato^{2,3}, Makiko Yamada^{1,3,4 *}

¹ *Quantum Life System group, Institute for Quantum Life Science, National Institutes for Quantum Science and Technology*

² *Saitama Gakuen University* ³ *Advanced Neuroimaging Center, Institute for Quantum Medical Science National Institutes for Quantum Science and Technology* ⁴ *Chiba University Graduate School of Science and Engineering*

In recent years, we are increasingly exposed to uncertainty in our social lives. While the ability to make quick decisions is often prioritized, the concept of “negative capability” has emerged as equally critical. Negative capability refers to the ability to suspend hasty judgments and accept uncertainty. Although this concept has gained significant attention in the humanities and social sciences, its abstract nature has limited its operationalization and empirical investigation. Consequently, its psychological underpinnings and associations with other traits remain unclear. To address this gap, the present study aimed to develop and validate a psychometric scale for negative capability. Through two surveys, we constructed a scale that reflects the theoretical dimensions of the concept. The resulting bi-factor model includes a general representing overall negative capability and five distinct group factors. The scale showed robust psychometric properties, including a hypothesized factor structure and a positive correlation with measures of ambiguity acceptance. It also effectively differentiated between individuals based on procrastination tendencies and showed strong correlation with emotional stability, aligning with the conceptualization of negative capability as an ability to navigate interpersonal uncertainties. Despite potential overlaps with constructs such as mindfulness, the scale offers a novel tool for quantifying negative capability. Future research should further explore the scale’s factor structure across diverse populations and examine its broader applicability to cognitive and behavioral domains. This work establishes a foundation for empirical studies of negative capability and its role in psychological resilience.

Keywords: Negative Capability (ネガティブ・ケイパビリティ), Uncertainty (不確実性), Wilfred R Bion (ウィルフレッド・ビオン), John Keats (ジョン・キーツ)

1. はじめに

1.1 背景

時代や環境によって負荷や程度の違いはあっても人は社会生活を送っていくうえで環境からの要求を達成することが求められ続けている。学業成績や仕事上の成果など現代社会では定められた期間に一定の目標を達成する必要がある、判断の速さが目標達成を左右する場面は少なくない。ヒューリスティッ

クや認知バイアスに代表されるように人には素早く結論を導こうとする性質が備わっており、この性質を利用することで不確実な状況下で素早く意思決定をおこなっていると考えられている (Tversky & Kahneman, 1983)。

しかし、素早い判断が必ずしも最適な判断であるわけではない。素早い判断は事実に関する膨大な情報を精査するために必要なコストを節約しつつ、経

* 責任著者. E-mail: yamada.makiko @qst.go.jp

本論文の査読前原稿は、Jxiv. JST プレプリントサーバ (6

December, 2024)で公開手続き中である。

1 験や物事の典型性を利用することで特定の環境下で
2 の行動を選択するという適応的側面がある。一方で、
3 経験や典型性から外れた不確実な情報は見逃される
4 ため、事実を歪めて認識してしまうという弊害があ
5 る。例えば、偏見は個人的特性を無視して社会的特徴
6 から個人を判断してしまう。このような事実の誤認
7 は、論理的な推論から他者理解場面に至るまでさま
8 ざまな場面で見られる。現代は社会生活で曝される
9 情報量の増加に伴って、個人にとって不確実な情報
10 の比重も増え続けていると考えられる。社会状況の
11 不確実性が高まる近年では広範な人文学・社会学領
12 域においてネガティブ・ケイパビリティと呼ばれる
13 概念が注目されている。

14 1.2 ネガティブ・ケイパビリティの定義

15 “...I mean Negative Capability, that is, when a man is
16 capable of being in uncertainties, mysteries, doubts,
17 without any irritable reaching after fact and reason
18 (John Keats, 1818[脚注 1])”

19
20 ネガティブ・ケイパビリティはイギリスの詩人
21 Keats が兄弟宛てに宛てた書簡の一節で用いた上記の造
22 語を起源としている。Keats はシェイクスピアの優れた
23 文学作品が「人が不確実性、神秘、疑いの中にあり
24 ながら、事実や理由をいらだたしげに追い求めるこ
25 となく、それらを受け入れることができる」という彼
26 の性質に由来しているのではないかと述べ、これを
27 ネガティブ・ケイパビリティと呼んだ (Keats, 1818[脚
28 注 1])。特に著名な詩人であるコールリッジの作品と
29 の対比において使われたことが指摘されるように
30 (Coulehan, 2017)、Keats のネガティブ・ケイパビリ
31 ティは、シェイクスピアの芸術の能力を表現するた
32 めに用いている。Keats がどういう文脈でネガティ
33 ブ・ケイパビリティという言葉にどういった意味を
34 込めたのかという真の意味については人文学的研究
35 を待つ必要があり、本研究ではこれ以上扱わない。

36 文学以外でネガティブ・ケイパビリティの概念が
37 注目されるようになった一つの契機は、Bion による
38 精神分析への導入である。Bion は、分析家の態度と
39 して必要な特徴としてこの概念を紹介した (Bion,
40 1970[脚注 2])。精神分析ではスーパービジョンや症
41 例検討などセラピスト同士の意見交換が重視される。
42 専門家同士の議論では、クライアントとの生の面談
43 体験について精神分析の専門用語を使って議論され
44 る。ここで、セラピストのクライアントとの生の面談

45 の体験が精神分析の枠組みを通じた解釈に置き換わ
46 ってしまう。解釈が介入すると解釈に当てはまらな
47 い重要な動きは見逃される。セラピストはこれを回
48 避すべきであり、対話の中で生じることを理性的に
49 も感情的にも判断せずに受け入れることの重要性を
50 Bion は論じた。そして、この能力を Keats の言葉を
51 引用してネガティブ・ケイパビリティと呼んだ。つま
52 り、Bion はネガティブ・ケイパビリティを芸術では
53 なく人の一般的な能力を指す言葉として使用してい
54 る。

55 このような背景を受けて、現在、ネガティブ・ケ
56 イパビリティは人の持つ能力を指す言葉として使わ
57 れるようになった。広範な人文・社会学的学問領域で
58 質的研究の説明に取り入れられている。これらの研
59 究でも Keats に従い、ネガティブ・ケイパビリティを
60 「不確実性の中にありながら、事実や理由を性急に
61 求めることなくそれらを受け入れることができる能
62 力」と定義している。

63 1.3 問題

64 このように、人間の能力として注目されるネガ
65 イブ・ケイパビリティだが、科学的な研究対象とする
66 場合、その定義が抽象的で直感的に理解することが
67 難しいという課題がある。それゆえ、生産性の高いリ
68 ーダーの資質 (Hirsch et al., 2023) や禅やマインドフ
69 ルネスへ到達する際の態度 (Todd, 2015) などさまざ
70 まな文脈で多様に用いられており、それぞれの研究
71 領域で質的に異なる解釈がなされることが少なく
72 ない。このような状況が、概念の複雑化を招いている。

73 この問題の解決に心理学的視点から取り組むため
74 に、本研究では量的に測定するための評価尺度を開
75 発することを目的とする。評価尺度の開発により実
76 証的な研究が可能となり、将来的にネガティブ・ケ
77 イパビリティが生産性につながるといった質的研究が
78 示唆する仮説の検討も可能となる。また、評価尺度は
79 ネガティブ・ケイパビリティの操作的定義を提供す
80 ることになるため、概念を整理するためのアンカー
81 として機能することが期待できる。

82 2. 尺度の作成

83 2.1 既存概念との異同と妥当性

84 尺度の作成にあたり、本研究でもネガティブ・ケ
85 イパビリティを「不確実性の中にありながら、事実や理
86 由を性急に求めることなくそれらを受け入れること
87 ができる能力」と定義する。以下では関連する概念と

1 の比較について述べる。

2 2.2 不確実性の受容

3 ネガティブ・ケイパビリティの「不確実性を受け入
4 れる」という側面については、類似する概念が提案さ
5 れているが、いずれも「理由を求めない」という側面
6 は包括していない。曖昧さについては、曖昧性耐性と
7 呼ばれる、分からない、できないといった事態の曖昧
8 さに対するストレスに耐えられる傾向について研究
9 が進められてきた。これらの研究からは耐性が高い
10 人は幸福感 (Hancock & Mattick, 2020) や学習意欲 (Yu
11 et al., 2021) も高いことが示されている。しかし、西
12 村 (2007) が指摘するように、曖昧さ耐性研究では、
13 曖昧さを否定的なものという側面からのみ捉えてお
14 り、あえて曖昧さを保持するというネガティブ・ケイ
15 パビリティとは異なっている。

16 これに対して、曖昧さへの態度の研究では、曖昧さ
17 耐性より多面的な態度を検討している (西村, 2007)。
18 この研究で開発された尺度では「いろいろな可能性
19 を試したい」といった曖昧さをポジティブに評価す
20 る傾向が測定できるように開発されており、曖昧さ
21 への態度は必ずしもネガティブなものではないこと
22 を示している。ネガティブ・ケイパビリティでは不確
23 実な物事の感情価にかかわらず受容することを指す
24 ため、西村 (2007) の曖昧さの受容と完全に一致する
25 ものではないが、概念的に重複する部分がある。この
26 ため、曖昧さへの態度尺度、特に曖昧さの受容とは正
27 の相関が予測されることから、基準関連妥当性の評
28 価のため調査に加えた。

29 2.3 判断の保留

30 性急に判断しないことは、判断を遅らせるという
31 意味では先延ばしの傾向が語義的に類似しているが、
32 これとは明確に区別する必要がある。先延ばしは、判
33 断しなければならぬこと・やらなければいけない
34 ことがすぐにできないことを指しており、あえて保
35 留するネガティブ・ケイパビリティとは異なる。しか
36 し、自己報告式の尺度では判断を保留する傾向に関
37 する質問が先延ばし傾向を反映する可能性が考えら
38 れる。そのため、先延ばし傾向を測定し、相関する質
39 問項目を除外するために General Procrastination Scale
40 (林, 2007) と Pure Procrastination Scale 日本語版 (金
41 子 他, 2022) を同時に実施することとした。

42 2.4 質的研究からの示唆

43 人文学・社会学的領域の先行研究は、実証的にネガ

44 ティブ・ケイパビリティとの関連を示してはいない
45 ため、基準関連妥当性の評価基準としては取り上げ
46 ないこととした。しかし、以下に示すように質的研究
47 はネガティブ・ケイパビリティが高い場合に達成さ
48 れる状態について仮説を提示しているものとするこ
49 とができる。そこで、本研究では尺度の構成概念妥
50 当性の検討のためこれらの仮説についても検討する。
51 具体的に検討する構成概念として、評価方法が開
52 発されており測定が可能である心理的構成概念であ
53 る他者理解場面とマインドフルネスを取り上げた。
54 他者理解について、Scharff & Scharff (1997)は、クラ
55 イアントとの面談の場面において、クライアントの
56 感情に飲まれずかつ方向性を設けずに場の対話をそ
57 のまま受け入れる態度をネガティブ・ケイパビリテ
58 ィと呼んでいる。Scharff & Scharff (1997)は精神分析
59 の立場から述べているが、近年では来談者中心療法
60 の共感的態度との関連も指摘されており、臨床場面
61 で重要な態度であることがうかがえる。

62 これらのことから、対人態度における感情にのま
63 れない傾向を反映すると考えられる対人反応性指標
64 (日道 他, 2018)、ストレス・コーピング・スキル尺
65 度 (木島, 2008) とネガティブ・ケイパビリティの関
66 連を検討した。対人反応性指標の下位尺度の個人的
67 苦痛因子、およびストレス・コーピング・スキル尺度
68 の情動的ストレス耐性因子は、感情の喚起による苦
69 痛度を測定できる。ネガティブ・ケイパビリティが高
70 い場合にクライアントの感情にのまれず受け入れる
71 ことが可能であるとすれば、正の相関が予測される。
72 また、禅やマインドフルネスの論考では、これらの目
73 指す状態とネガティブ・ケイパビリティに重複する
74 部分が多いと考えられている (Todd, 2015)。レジリ
75 エンス、ネガティブ・ケイパビリティの態度はマイン
76 ドフルネスや仏教上の理想状態に近づいていくため
77 に持つべき態度であるといった考察がされている。
78 マインドフルネスは、感情の安定をもたらし、自尊心
79 や内部統制感を向上させることでレジリエンスを向
80 上させることが報告されており (Dong et al., 2022)、
81 ネガティブ・ケイパビリティがマインドフルネスに
82 必要な態度であるならばこれらの間の関連性も支持
83 されると考えられる。そこで、マインドフルネスの評
84 価として 6 因子マインドフルネス尺度 (前川・越川
85 (2015) とマインドフルネスが影響を持つ内部統制
86 感を Locus of control 尺度 (鎌原 他, 1982) により測
87 定することとした。

2.5 ネガティブ・ケイパビリティ尺度の留意点

心理尺度の開発では測定対象を反映すると考えられる質問項目に共通する心理特性を因子分析などを用いて抽出する。この際、対象とする心理特性を網羅できるように質問項目プールを作成する必要がある。先述のとおりネガティブ・ケイパビリティは多様な概念との関連が指摘されるが、実証はされていない。そこで、本研究では Keats の定義から逸脱しないように、不確実性の中にありながら、事実や理由を性急に求めることなくそれらを受け入れることができる能力と合致する具体的な心理・行動に関するがように質問文を作成することとした。具体的には、不確実性下の反応、原因・責任追及、先入観の回避、受容的態度、問題解決のスタイル、柔軟性のカテゴリを設けた。

2.6 因子構造についての仮説

通常、心理尺度の開発では作成した質問文から探索的に因子構造が決められることが多い。そのため、特定の心理概念を測定する目的で作成された尺度であっても、多因子構造として表現されることも少なくない。対象とする概念によっては他因子モデルの場合に尺度全体が何を反映しているかが不明瞭になってしまうという問題が指摘されている (Reise, et al., 2007)。ネガティブ・ケイパビリティの概念は抽象的であるため、他因子構造では尺度全体の解釈が困難になってしまう可能性が考えられる。そのため、ネガティブ・ケイパビリティ尺度としては、全ての質問項目に寄与する共通因子が抽出されるように尺度を作成することが望ましいと判断した。

一方で、因子構造は質問項目の作成時に意図していない文の構造など質問文の表面的な側面にも影響を受ける (Podsakoff et al., 2003)。本研究においても、複数カテゴリを中心に質問文を作成しているため、複数の因子が抽出されることが予想される。そのため本研究では、多因子かつ一般因子持つモデルとして尺度を開発する必要がある。したがって、階層モデルまたは双因子モデルが想定される。

階層モデルと双因子モデルは因子分析のモデルの一つである (図 1)。階層モデルは複数の因子に影響する上位の因子を仮定することで、また双因子モデルは全質問項目に共通する一般因子を仮定することで、尺度全体に影響する因子 (心理傾向) を評価することができる。したがって、ネガティブ・ケイパビリティ尺度としては、不確実性を受容する側面や、判断

を保留する傾向などネガティブ・ケイパビリティの構成要素が群因子として抽出されることが予測される。そして質問項目全般に影響する因子をネガティブ・ケイパビリティとして解釈できるようになる。実際、抽象度の高い自己実現的幸福度の測定では、共通因子の仮定が妥当と考えられ、因子構造の再評価がおこなわれている (Fadda et al., 2017)。

これらのことから、本研究では調査 1 にて尺度の作成ならびに共通因子が仮定できるかどうかを検討し、得られた因子構造を調査 2 で確認することとした。

3. 方法

3.1 質問文の作成

Keats と Bion に基づき、ネガティブ・ケイパビリティの定義である不確実性の中にありながら、事実や理由を性急に求めることなくそれらを受け入れることができる能力に合致するように、研究者 5 名が協議し質問項目プールを作成した。質問文が規範的・否定的な意味内容となることによる回答のバイアスを避けるため、逆の意味の質問文で構成した。例えば、性急な結論を出さない傾向に関連すると考えられる「決めつけたもの見方はしない」という質問には「他人の態度から何を考えているかわかる」という逆転項目として作成した。項目プールのうち、比較文化的観点から日本特有と考えられる 1 項目を除外した。最終的に、56 文からなる原案を作成した。

3.2 調査対象者と調査時期

3.2.1 調査 1

2024 年 7 月から 8 月に調査会社を通じてクラウドソーシング会社を利用しオンライン調査を実施した。期間内に回答のあった回答のうち不備のない 498 名を分析対象とした。分析対象者の基本属性を表 1 に示す。回答者の年齢は 20 歳から 65 歳、平均 41.6 歳 ($SD = 10.0$) であった。

3.2.2 調査 2

調査 1 と同様に調査会社を通じて 2024 年 11 月に調査を実施した。調査 2 では初回と 12 日後に回答を求めており、回答者のうち 331 名が調査 1 参加者、161 名が調査 2 からの参加者であった。調査内容はネガティブ・ケイパビリティ尺度のみであった。

3.3 倫理的配慮

本研究は国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構の臨床研究審査委員会に承認された研究計画に基づいて実施した。回答者には調査に先立ち説明文

1 書を提供し、参加の同意が可能な者が回答に参加し
2 た。説明文書には調査は中断可能であることを明記
3 した。参加者には報酬が支払われた。

4 3.4 調査構成

5 1. ネガティブ・ケイパビリティ尺度

6 本研究で作成したネガティブ・ケイパビリティ尺
7 度 56 項目を実施した。6 件法により測定した (1:ま
8 ったくあてはまらない, 2 :あてはまらない, 3:あ
9 まりあてはまらない, 4:ややあてはまる, 5:あては
10 まる, 6:非常にあてはまる)。

11 2 曖昧さへの態度尺度 (西村, 2007)

12 曖昧さに対する態度を多角的に測定する尺度であ
13 り, 5 因子で構成されている: 曖昧さの享受, 曖昧さ
14 への不安, 曖昧さの受容, 曖昧さの統制, 曖昧さの排
15 除。6 件法で実施した。

16 3 Pure Procrastination Scale 日本語版 (金子他., 2022)

17 やらなければならないことを後回しにしてしまう
18 傾向を評価する尺度であり, 日本語版は実行の先延
19 ばし (例, 期限が迫っていても, 他のことに時間を費
20 やしてしまう), 決断の先延ばし (例, 手遅れになる
21 まで, 決断を遅らせる), 非適時性 (例, 気がついて
22 みると時間がなくなっている) の 3 因子からなる 5
23 件法の尺度である。

24 4 General Procrastination Scale (林, 2007)

25 先延ばし傾向を測定する 5 件法の一因子構造の尺
26 度である。Pure Procrastination Scale が主な対象として
27 大学生を想定しており, 課題の提出などに関連した
28 質問内容であるのに対して, General Procrastination
29 Scale は生活全般を想定した質問項目が多く含まれる
30 (例, どたんばになって, 誕生日プレゼントを買うこ
31 とがよくある)。

32 5 Locus of control 尺度 (鎌原 他, 1982)

33 鎌原ら (1982) によって作成された 4 件法の尺度
34 で, Locus of control は自身の行動の統制可能感を指し
35 ている。自信の行動が他者によって決められている
36 と感じる外的統制感と自分自身で決めていると感じ
37 る内的統制感を測定する。

38 6 ストレス・コーピング・スキル尺度 (木島, 2008)

39 ストレスコーピングを 13 因子で捉える尺度であり,
40 7 件法で実施した。

41 7 日本語版対人反応性指標 (日道 他, 2018)

42 対人場面についての尺度であり, 個人的苦痛, 共感
43 的関心, 視点取得, 創造性からなる 7 件法の尺度で
44 ある。

45 86 因子マインドフルネス尺度 (前川・越川, 2015)
46 マインドフルネスの実践傾向を測定する。5 件法で
47 回答を求める。

48 4. 結果と考察

表 1

49 4.1 記述統計量

50 解析には R version 4.3.3 (R Core Team, 2021)を利用
51 した。ネガティブ・ケイパビリティ尺度の全質問項目
52 において, 回答者の回答範囲は最大値 6, 最小値 1,
53 平均値は 2.5 から 4.9 ($SD = 0.9$ から 1.5,) であり天
54 井効果・床効果はなかった。各質問項目の分布から歪
55 度が 1.0 以上または-1.0 以下の質問項目, 尖度が 1.0
56 以上の項目を除外した。続いて, 先延ばし傾向を測る
57 Pure Procrastination Scale の各下位尺度および General
58 Procrastination Scale の合計得点と逆転処理前のネガ
59 ティブ・ケイパビリティ尺度各項目のポリシリアル
60 相関係数を算出し, いずれかの得点と 0.2 以上の値を
61 示した質問項目を除外した。残りの項目について Q-
62 Q プロットを確認したところ著しい偏りは認められ
63 なかった。

64 4.2 因子構造

65 逆転処理を行った後に質問項目間のポリコリック
66 相関行列を用い Kaiser-Meyer-Olkin の妥当性指標を
67 算出したところ.86 であったため因子分析の適用が
68 妥当であると判断した。

69 群因子数を定めるため主因子法, 斜交ジオミン回
70 転による探索的因子分析をおこなった。因子数はス
71 クリープロット, 並行分析, MAP 基準, BIC 基準を
72 参考に解釈可能な因子数を検討した。はじめに, MAP
73 基準を参考に 8 因子モデルの探索的因子分析をおこ
74 ない共通性.4 以下の質問項目を除外した。再度 8 因
75 子モデルの因子分析をおこない, 負荷量の高い質問
76 項目を 3 つ以上もたない因子については質問項目ご
77 と除外した。また, 共通性.4 未満の質問項目も除外し
78 た。残りの質問項目について再度並行分析, MAP 基
79 準, BIC 基準を求め探索的因子分析を行った。その結
80 果, 因子の解釈可能性が高かったことから MAP 基準
81 が示す 5 因子モデルを選択した。一般因子が影響し
82 ている可能性を想定しているためここまでの分析で
83 は複数因子に重複して因子負荷量が高い質問項目は
84 除外しなかった。

85 その後, 質問項目全般に共通する因子を抽出する
86 ため, 双因子モデルによる確認的因子分析を実施し
87 た。ネガティブ・ケイパビリティが一般因子として機

1 能しており、各質問項目全般に影響していると考え
 2 たため、群因子間は直交するモデルを選択した。分析
 3 にあたっては探索的因子分析の結果、因子負荷量が
 4 マイナスを示した質問項目を除外した。また、一般因
 5 子が特定の群因子に属する項目に偏らないよう、群
 6 因子への寄与が低い項目を削除し (Bornovalova et al.,
 7 2020)、各群因子に含まれる質問項目の数を統一し最
 8 終的なネガティブ・ケイパビリティ尺度とした (表 2)。
 9 作成した尺度が一般因子を仮定することが妥当で
 10 あるか検討するため双因子モデル、全群因子に影響
 11 する上位因子を 1 つ持つ階層因子モデル、探索的因
 12 子分析に基づく多因子モデルの比較をおこなった。
 13 作成した尺度とモデル比較の結果を Table 2 に示す。
 14 双因子モデルでは、一般因子であるネガティブ・ケイ
 15 パビリティ因子が、各群因子と独立して質問項目全
 16 般に影響していることを仮定する。一方、階層因子モ
 17 デルはネガティブ・ケイパビリティ因子が各群因子
 18 に影響していることを仮定する。最後に多因子モデ
 19 ルは尺度全体に影響するネガティブ・ケイパビリテ
 20 ィ因子を仮定しない。これらのモデルはすべて群因
 21 子間の直交を仮定し、Lavaan パッケージ (Rosseel,
 22 2012) による加重最小二乗法による推定をおこなっ
 23 た。各モデルともすべての因子負荷量は有意であり、
 24 双因子モデルと階層モデルは多因子モデルより適合
 25 度が高かった。この結果は、尺度全般に影響する因子
 26 を仮定する方が妥当であることを示している。階層
 27 モデルと双因子モデルの比較では、全適合度指標に
 28 おいて双因子モデルの適合度が高く、仮説に基づき
 29 最終的に双因子モデルを採用した。双因子モデルの
 30 尺度全体の信頼性係数は $\omega = .71$ で許容可能な範囲で
 31 あると判断した。

32 4.3 ネガティブ・ケイパビリティ尺度

33 双因子モデルは質問全般に影響するネガティブ・
 34 ケイパビリティを反映する一般因子を想定したモデ
 35 ルであった。そのため、一般因子 (general) はネガテ
 36 ィブ・ケイパビリティ因子とした。群因子については、
 37 因子 1 は「人の失敗の原因がどこにあるのかはつき
 38 りさせたい」など原因を追究する傾向の逆転項目で
 39 構成されているため、不確実性解消への動機づけの
 40 低さを反映していると考えられる。因子 2 は「理解
 41 の難しい複雑な状況に身を置きたくない」など不確
 42 実性を避ける傾向の逆転項目であり、不確実性への
 43 否定的反応の低さに関連している。因子 3 は「他人
 44 の態度から何を考えているかわかる」など先入観や

45 思い込みに関する質問の逆転項目であり性急に結論
 46 を出さない傾向を反映していると考えられる。因子 4
 47 は不確実性の受容に関する質問項目で構成された。
 48 最後に、因子 5 は「人が話しているところについ口
 49 を出してしまう。」など必要な情報を待たずに行動
 50 してしまう傾向に関する項目で構成されており、そ
 51 の逆転項目として「性急な行動の抑制」を反映してい
 52 ると考えられる。ただし、本尺度は双因子モデルを想
 53 定し構成しているため再検査信頼性とあわせて因子
 54 構造の再現性について調査 2 で検討した。

55 調査 2 の 1 日目に参加した回答者 473 名のデー
 56 タを用い、双因子モデルについて確認的因子分析を行っ
 57 た。加重最小二乗法による推定ができなかったため、
 58 平均調整付き加重最小二乗法による推定をおこなっ
 59 た。その結果、全ての因子負荷量が有意であり、適合
 60 度は許容できるものであった。これらのことから、本
 61 尺度の構造としてはネガティブ・ケイパビリティ因
 62 子を一般因子をもつ双因子構造と結論付けた。

63 また、調査 1 および調査 2 の 2 日間に回答の得ら
 64 れた 327 名のデータを用い再検査信頼性を評価した
 65 ところ、調査 1 と 3 か月後の信頼性係数は $\rho = .813$ 、
 66 さらに 2 週間後では $\rho = .827$ であった。これらの値
 67 は尺度の信頼性指標としては十分であると考えられ
 68 る。この結果は、ネガティブ・ケイパビリティは状態
 69 による変動の小さい心理特性であることを示唆して
 70 いる。

71 2 回の調査から質問全般に共通する一般因子を想
 72 定した双因子構造が確認できたことから、本尺度は
 73 ネガティブ・ケイパビリティ概念を測定する尺度と
 74 して一定の妥当性を示したと考えられる。しかし、因
 75 子負荷量を見ると、「やりたいことを衝動的にやって
 76 しまうことが多い。」といった項目の一般因子への寄
 77 与はそれほど高くなく、検討の余地がある。本調査で
 78 は、成育歴や経験など母集団の特性の違いに関する
 79 仮説を持っておらず、これらのデータは取得してい
 80 なかった。そのため単一の母集団として扱った。しか
 81 し、双因子構造を持つユーダイモニックウェルビー
 82 イングは、異なる集団間で因子構造が変化すること
 83 が報告されており (Ishii et al, 2020)、ネガティブ・ケ
 84 イパビリティ尺度についても複数の集団間の比較検
 85 討が必要であると考えられる。

86 4.4 基準関連妥当性

87 作成した尺度の各因子の合計得点と既存の心理尺
 88 度との合計得点の相関を算出した (表 3)。曖昧さへ

1 の態度尺度 (西村, 2007) との相関については, ネガ
2 ティブ・ケイパビリティ尺度の一般因子と不確実性
3 の受容因子が, 曖昧さへの態度尺度の曖昧さへの不
4 安, 曖昧さの統制, 曖昧さの排除の因子とそれぞれ中
5 程度の負の相関を示し, 曖昧さの受容因子とは正の
6 相関が見られた. そのためネガティブ・ケイパビリテ
7 ィ尺度は不確実性の受け入れ傾向を測定できている
8 ものと考えられる. また, ネガティブ・ケイパビリテ
9 ー一般因子は曖昧さを楽しむ傾向を示す曖昧さの享
10 受因子との相関が低かった ($r = .09$). この結果は,
11 ネガティブ・ケイパビリティ因子が不確実性をニュ
12 ートラルに受け入れる傾向を適切に反映しているこ
13 とを表していると考えられる. また, 性急な結論を出
14 さない傾向の因子が曖昧さへの態度尺度の下位尺度
15 とほぼ相関がないという結果も曖昧さへの態度尺度
16 とネガティブ・ケイパビリティ尺度が異なる傾向を
17 測定していることを支持していると考えられる.

18 先延ばし傾向との正の相関は, ネガティブ・ケイパ
19 ビリティ尺度の性急に結論を出さない傾向と実行の
20 先延ばし因子の間でのみ有意であった. しかし, 相関
21 係数は $r = .09$ と非常に小さいものであり, 性急に結
22 論を出さない傾向の分散の説明率は 1%未満である.
23 その他各因子と Pure Procrastination Scale の下位尺度
24 ならびに General Procrastination Scale の間に正の相関
25 が示されなかったこととあわせて, ネガティブ・ケイ
26 パビリティの判断を保留する傾向は, 先延ばし傾向
27 とは適切に弁別できたと考えられる.

28 4.5 心理特性との関連

29 心理療法など対人場面において推奨される態度と
30 ネガティブ・ケイパビリティの関連を検討するため,
31 対人反応性指標とストレス・コーピング・スキル尺度
32 との相関を検討した. ネガティブ・ケイパビリティ尺
33 度は, 一般因子と不確実性への否定的反応の低さが
34 個人的苦痛と負の相関を示した. 個人的苦痛因子は,
35 「非常事態では, 落ち着かなくなる」や「誰かが傷つ
36 けられているのを見たとき, 落ち着いていられる方
37 だ (逆転項目)」といった感情的な混乱や他者の感情
38 に引きずられる傾向を意味している. 加えて, ストレ
39 ス・コーピング・スキル尺度の情動的ストレス耐性因
40 子, 攻撃性の抑制といった感情的安定に関連する因
41 子もネガティブ・ケイパビリティ尺度の複数の因子
42 と中程度から強い正の相関を示している. ネガティ
43 ブ・ケイパビリティ尺度の得点が高いほどこの傾向
44 が低いことは, Scharff & Scharff (1997)らが推奨する

45 クライアントの感情に飲まれずかつ方向性を設けず
46 に場の対話をそのまま受け入れる態度がネガティ
47 ブ・ケイパビリティと関連することを支持している
48 と考えられる.

49 ネガティブ・ケイパビリティが高い場合に感情的
50 な安定性が高いことは, 仏教や禅との関連の中で議
51 論されるネガティブ・ケイパビリティの影響の一つ
52 であり (Svalgaard, 2015), 本調査の結果はそれらの知
53 見を支持するものでもあると考えられる. また, 開発
54 した尺度の不確実性の受容因子と Locus of control 尺
55 度の内的統制感因子とも中程度の正の相関を示して
56 いる. 内的統制感は, 「あなたは, 自分の一生を思い
57 どおりに生きることができると思いますか。」など自
58 分に起こることが自身の行動によって変わるとい
59 うことについての信念を反映している. この因子はマ
60 インドフルネスとともに動機づけや幸福感を向上さ
61 せる要因と考えられており (Dong et al., 2022), ネガ
62 ティブ・ケイパビリティがマインドフルネスに関連
63 しているというか説を部分的に支持するものと考え
64 られる.

65 しかし, 6 因子マインドフルネス尺度とネガティ
66 ブ・ケイパビリティ尺度は性急に結論を出さない傾
67 向を除きほとんど因子間で負の相関が認められてい
68 る. これはネガティブ・ケイパビリティが高い場合に,
69 マインドフルネス傾向が低いことを示している. 特
70 に, 不確実性への否定的反応の低さの因子はマイン
71 ドフルネス尺度のすべての因子と中程度の負の相関
72 が認められ, 「過去や未来のことについて考えるより,
73 今現在に集中する」などが含まれる現在に思考が向
74 いている傾向が含まれる因子との相関係数は特に高
75 かった ($r = -.52$). 両者の負の相関が現れた原因とし
76 て, 一つは回答者がマインドフルネスを実践してい
77 るわけではないことがあげられる. 6 因子マインドフ
78 ルネス尺度は「瞬間瞬間の思考に気付いている」など
79 自身の内面で生じることに注意を向けている傾向を
80 尋ねている. しかし, これにはマインドフルネスの訓
81 練を要するはずであり, 訓練をしていない場合はこ
82 ういった質問を具体的に理解するのが難しいのかも
83 しれない. 本研究ではマインドフルネスの実践につ
84 いて回答を求めていなかったため, 具体的なマイン
85 ドフルネスの体験とネガティブ・ケイパビリティの
86 関連について結論を出すことはできなかった. マイ
87 ドフルネスとの関連は今後のマインドフルネスの
88 実践をおこない, 縦断的に検討する必要があると考

1 えられる。

2 5. 結論

3 本研究ではネガティブ・ケイパビリティ尺度を開
4 発し、諸概念との関連を比較した。尺度の因子構造は
5 ネガティブ・ケイパビリティに該当する一般因子を
6 持つ双因子モデルを仮定した。調査 1 では仮説に基
7 づき一般因子と 5 つの群因子からなる双因子モデル
8 に基づく尺度を作成し、2 か月後の調査 2 では同一の
9 モデルを再現することができた。

10 また、作成したネガティブ・ケイパビリティ尺度は
11 「不確実性解消への動機づけの低さ」、「不確実性へ
12 の否定的反応の低さ」、「性急に結論を出さない傾向」、
13 「不確実性の受容」、「性急な行動の抑制」の 5 つの
14 群因子を持っている。群因子はいずれもネガティブ・
15 ケイパビリティの定義を適切に反映していると考え
16 られた。既存の尺度との相関を見ても、曖昧さの受容
17 尺度とは共通する部分を有しているが、性急な行動
18 の抑制・結論を出さない傾向の点から単なる曖昧さ
19 を受容することとネガティブ・ケイパビリティは概
20 念的に異なることが示唆された。また、先延ばし傾向
21 と性急な判断を保留する傾向も適切に弁別されてい
22 た。このことから、本尺度はネガティブ・ケイパビリ
23 ティを測定する心理尺度として使用に耐えるもので
24 あると結論付けた。ネガティブ・ケイパビリティを心
25 理的構成概念として定量的に評価することが可能と
26 なったことで、質的研究から得られた仮説の評価に
27 も貢献することが期待される。

28 利益相反の開示

29 本研究に関して開示すべき利益相反はない。

30 謝 辞

31 質問文の作成において量子科学技術研究開発機構
32 の相澤裕紀氏、同機構の岩崎衛氏に協力いただいた。
33 質問項目の選定について Leibniz-Institut für
34 Resilienzforschung の Max Supke 氏, Michele Wessa 氏,
35 Sarah Schaefer 氏に比較文化の観点から助言をいた
36 いた。本研究は JST Moonshot R&D Grant
37 (JPMJMS2295)の助成を受けた。

38 文 献

39 Bion, W. R. (2018). *Three papers of W.R. Bion* (C. Mawson, Ed.).
40 Routledge Cavendish.
41 <https://doi.org/10.4324/9780429454554>

42 (Bion, W.R. 福本 修 訳 (2023) . ビオンの三論文 岩
43 波学術出版社
44 Bornovalova, M. A., Choate, A. M., Fatimah, H., Petersen, K. J.,
45 & Wiernik, B. M. (2020). Appropriate use of bifactor
46 analysis in psychopathology research: Appreciating benefits
47 and limitations. *Biological Psychiatry*, 88(1), 18–27.
48 <https://doi.org/10.1016/j.biopsych.2020.01.013>
49 Coulehan, J. (2017). Negative capability and the art of medicine.
50 *JAMA: The Journal of the American Medical Association*,
51 318(24), 2429–2430.
52 <https://doi.org/10.1001/jama.2017.19333>
53 Dong, X., Li, X., Jiang, X., & Xiang, Y. (2022). How does
54 mindfulness relate to benign/malicious envy? The mediating
55 role of resilience, internal locus of control and self-esteem.
56 *Frontiers in Psychiatry*, 13.
57 <https://doi.org/10.3389/fpsy.2022.878690>
58 Fadda, D., Francesca Scalas, L., Meleddu, M., & Morin, A. J. S.
59 (2017). A bifactor-ESEM representation of the
60 Questionnaire for Eudaimonic Wellbeing. *Personality and*
61 *Individual Differences*, 116, 216–222.
62 <https://doi.org/10.1016/j.paid.2017.04.062>
63 林 潤一郎. (2007). General Procrastination Scale 日本語版の
64 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 15(2), 246–248.
65 <https://doi.org/10.2132/personality.15.246>
66 Hancock, J., & Mattick, K. (2020). Tolerance of ambiguity and
67 psychological well-being in medical training: A systematic
68 review. *Medical Education*, 54(2), 125–137.
69 <https://doi.org/10.1111/medu.14031>
70 日道 俊之, 小山内 秀和, 後藤 崇志, 藤田 弥世, 河村 悠
71 太, Davis, Mark H., 野村 理朗. (2017). 日本語版対人反
72 応性指標の作成. 88, 1, p. 61–71.
73 <https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.15218>
74 Hirsch, C., von Bülow, C., & Simpson, P. (2023). Stoicism,
75 philosophy as a way of life and Negative Capability:
76 Developing a capacity for working in radical uncertainty.
77 *Leadership (London)*, 19(5), 393–412.
78 <https://doi.org/10.1177/17427150231178092>
79 Simpson, P., & French, R. (2006). Negative Capability and the
80 Capacity to Think in the Present Moment: Some
81 Implications for Leadership Practice. *Leadership*, 2(2), 245–
82 255.
83 <https://doi.org/10.1177/1742715006062937>
84 Ishii, Y., Sakakibara, R., Komoto Kubota, A., & Yamaguchi, K.
85 (2022). Reconsidering the structure of the questionnaire for
86 eudaimonic well-being using wide age-range Japanese adult
87 sample: An exploratory analysis. *BMC Psychology*, 10(1), 3.
88 <https://doi.org/10.1186/s40359-021-00707-2>
89 Keats, J. (1958). *The letters of John Keats* (H. E. Rollins, Ed.).
90 Cambridge University Press. (Original work in 1818)
91 鎌原 雅彦・樋口 一辰・清水 直治. (1982). Locus of
92 Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討. *教育心
93 理学研究*, 30(4), 302–307.
94 https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.4_302

- 1 金子 泰徳, 池田 寛人, 藤島 雄磨, 梅田 亜友美, 小口 真
2 奈, 高橋 恵理子. (2022). Pure Procrastination Scale 日本
3 語版の作成および信頼性と妥当性の検討. *パーソナリ
4 ティ研究*, 31(1), 1–11.
5 <https://doi.org/10.2132/personality.31.1.1>
- 6 木島 恒一. (2008). ストレス・コーピング・スキル尺度の
7 作成 : その信頼性・妥当性の検討. *心身医学*, 48(8),
8 731–740.
9 https://doi.org/10.15064/jjpm.48.8_731
- 10 前川 真奈美・越川 房子. (2015). 6 因子マインドフルネス
11 尺度(SFMS)の開発. *健康心理学研究*, 28(2), 55–64.
12 https://doi.org/10.11560/jahp.28.2_55
- 13 McCarthy, A. C., Rejack, B., & Theune, M. (2019). Zen and the
14 Art of Negative Capability. In *Keats's Negative Capability:
15 New Origins and Afterlives* (pp. 232–244). Liverpool
16 University Press.
17 <https://doi.org/10.2307/j.ctvhn0df8.23>
- 18 西村 佐彩子. (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討.
19 *パーソナリティ研究*, 15(2), 183–194.
20 <https://doi.org/10.2132/personality.15.183>
- 21 Podsakoff, P. M., MacKenzie, S. B., Lee, J.-Y., & Podsakoff, N.
22 P. (2003). Common method biases in behavioral research: a
23 critical review of the literature and recommended remedies.
24 *The Journal of Applied Psychology*, 88(5), 879–903.
25 <https://doi.org/10.1037/0021-9010.88.5.879>
- 26 R Core Team (2021). R: A language and environment for
27 statistical computing. R Foundation for Statistical
28 Computing, Vienna, Austria. URL [https://www.R-
29 project.org/](https://www.R-project.org/).
- 30 Reise, S. P. (2012). The Rediscovery of Bifactor Measurement
31 Models. *Multivariate Behavioral Research*, 47(5), 667–696.
32 <https://doi.org/10.1080/00273171.2012.715555>
- 33 Reise, S. P., Morizot, J., & Hays, R. D. (2007). The role of the
34 bifactor model in resolving dimensionality issues in health
35 outcomes measures. *Quality of Life Research*, 16, 19–31.
36 <https://doi.org/10.1007/s11136-007-9183-7>
- 37 Rosseel Y (2012). lavaan: An R Package for Structural Equation
38 Modeling. *Journal of Statistical Software*, 48 (2), 1–36.
39 <https://doi.org/10.18637/jss.v048.i02>
- 40 Simpson, P., & French, R. (2006). Negative Capability and the
41 Capacity to Think in the Present Moment: Some
42 Implications for Leadership Practice. *Leadership*, 2(2), 245–
43 255.
44 <https://doi.org/10.1177/1742715006062937>
- 45 Svalgaard, L. (2015). The Struggle of Staying with Toxic
46 Emotions when all you want to do is Leave: An exploration
47 of the idea of mindfulness in fostering negative
48 capability. *Socioanalysis*, 17, 43–63.
- 49 Todd, S. (2015). Experiencing change, encountering the
50 unknown: An education in ‘negative capability’ in light of
51 Buddhism and Levinas: An education in ‘negative capability’
52 in light of Buddhism and Levinas. *Journal of Philosophy of
53 Education*, 49(2), 240–254.
54 <https://doi.org/10.1111/1467-9752.12139>
- 55 Tversky, A., & Kahneman, D. (1983). Extensional versus
56 intuitive reasoning: The conjunction fallacy in probability
57 judgment. *Psychological Review*, 90(4), 293–315.
58 <https://doi.org/10.1037/0033-295x.90.4.293>
- 59 Yu, M., Wang, H., & Xia, G. (2021). The review on the role of
60 ambiguity of tolerance and resilience on students’
61 engagement. *Frontiers in Psychology*, 12
62 <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.828894>

1 脚注

2 脚注 1

3 出典は Keats, J. (1958) (H. E. Rollins, Ed.)に基づくが、
4 手紙が記されたのは 1818 年であった。

5

6 脚注 2

7 出典は Bion, W. R. (2018). *Three papers of W.R. Bion* (C.
8 Mawson, Ed.). 福本 修 訳 (2023) .ピオンの三論文に
9 基づくが、Bion が言及したのは、1970 年であった。

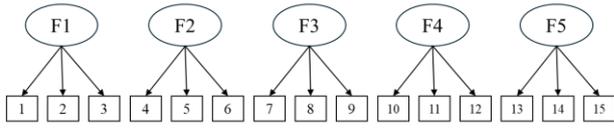
10

11

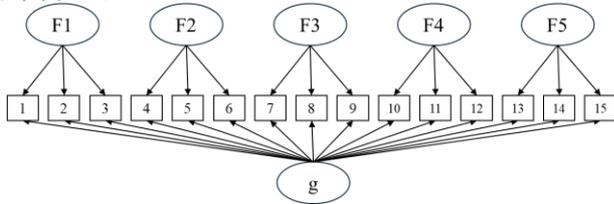
12

1 図

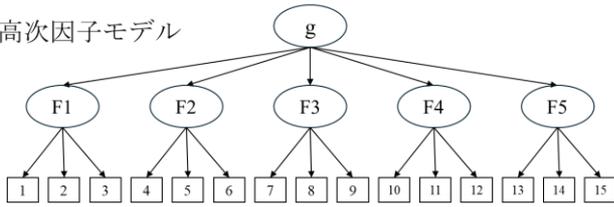
図 1
因子分析のモデル
多因子モデル



双因子モデル



高次因子モデル



2

3

4

1 表

表 1

回答者の年齢と性別の分布

	調査1 (n = 495)			調査2 (n = 454)		
	女性	男性	その他	女性	男性	その他
20代	38	25	1	31	16	0
30代	83	64	2	89	49	0
40代	96	77	0	89	70	0
50代	55	37	1	58	36	0
60代	7	9	0	7	9	0

2

3

1
2
3

表2
ネガティブ・ケイパビリティ尺度における確認的因子分析結果

モデル 質問文	調査1				調査2		
	5因子	高次因子		双因子		双因子	
	λ	λ(高次)	λ(下位)	λ(一般)	λ(群)	λ(一般)	λ(群)
因子1 不確実性解消への動機付けの低さ							
1 悪いことが起こったら原因をはっきりさせたい。*	.480		.626	.555	.378	.578	.327
2 他人の失敗の原因がどこにあるのかははっきりさせたい。*	.688	.641	.732	.479	.606	.417	.656
3 問題が起こったら誰に責任があるのかははっきりさせた	.707		.775	.557	.560	.558	.468
因子2 不確実性への否定的反応の低さ							
4 理解の難しい複雑な状況に身を置きたくない。*	.584		.546	.306	.739	.330	.541
5 先の見通しが立たないと不安を感じる。*	.506	.889	.623	.519	.350	.592	.566
6 何か問題があると頭から離れなくなる。*	.584		.761	.789	.216	.443	.468
因子3 性急に結論を出さない傾向							
7 他人の態度から何を考えているかわかる。*	.641		.734	.354	.657	.122	.638
8 他人の外見から性格の予想がつく。*	.703	.535	.755	.363	.646	.183	.693
9 うまく付き合える人とそうでない人の予想がつく。*	.549		.614	.341	.478	.247	.707
因子4 不確実性の受容							
10 不完全なところもある程度受け入れることができる。	.559		.703	.293	.746	.384	.898
11 矛盾していることでも受け入れる方だと思う。	.587	.360	.631	.361	.479	.439	.693
12 新しい人と出会うのが好きだ。	.245		.296	.145	.197	.178	.707
因子5 性急な行動の抑制							
13 人が話しているところについ口を出してしまう。*	.490		.452	.237	.426	.230	.595
14 やりたいことを衝動的にやってしまうことが多い。*	.562	.584	.509	.172	.640	.063	.482
15 思いついたことはすぐに言いたい。*	.624		.850	.487	.538	.421	.657
	CFI	.674	.798		.839		.925
	TLI	.620	.751		.775		.895
	RMSEA	.141	.115		.109		.097
	SRMR	.142	.094		.089		.076

Note. λは標準化後の因子負荷量を示す。TLI = Comparative Fit Index. TLI = Tucker-Lewis Index. RMSEA = Root Mean Square Error of Approximation. SRMR = Standardized Root Mean Square Residual. アスタリスクの付された質問文は逆転項目を意味する。因子負荷量はすべて5%水準で有意であったため、p値の記載は省略した。

4
5
6
7
8

1

表3
ネガティブ・ケイパビリティ尺度の各因子と心理尺度とのピアソン相関係数

尺度下位因子	一般因子 ネガティブ ケイパビリティ	因子1 不確実性解消へ の動機づけの低	因子2 不確実性への否 定的反応の低さ	因子3 性急に結論を 出さない傾向	因子4 不確実性の受容	因子5 性急な行動の 抑制
曖昧さへの態度尺度						
・ 曖昧さの享受	.09	-.11	.26	-.17	.41	-.09
・ 曖昧さへの不安	-.47	-.16	-.65		-.36	-.18
・ 曖昧さの受容	.33	.26	.25		.44	
・ 曖昧さの統制	-.39	-.43	-.37	-.15	-.13	
・ 曖昧さの排除	-.40	-.43	-.23	-.15	-.19	-.14
Pure Procrastination Scale						
・ 実行の先延ばし	-.21		-.21	.09	-.17	-.33
・ 決断の先延ばし	-.29		-.31		-.23	-.28
・ 非適時性	-.20		-.20		-.13	-.28
General Procrastination Scale						
	-.24		-.23		-.17	-.36
日本語版対人反応性指標						
・ 個人的苦痛	-.47	-.15	-.59		-.27	-.30
・ 共感的関心	-.14	-.14		-.19	.22	-.23
・ 視点取得		-.17	.10	-.22	.30	
・ 想像性	-.21	-.16		-.27	.10	-.18
ストレス・コーピング・スキル尺度						
・ 情動的ストレス耐性	.53	.18	.70		.38	.25
・ 積極的対応	.16	-.14	.20	-.18	.23	.33
・ 攻撃性の抑制	.57	.27	.50		.37	.46
・ 社会的サポートの所有			.15	-.18	.33	
・ 環境の変化への迅速な対応	.29		.47	-.22	.57	
・ 自己主張	-.21	-.26		-.19		-.20
・ 社会的サポートの活用						-.13
・ プラス思考	.26		.38	-.18	.49	
・ 対人コミュニケーションに おける適切な対応		-.13		-.44	.22	.24
・ 悠然的対応		-.10		-.22	.20	.15
・ 冷静さの維持	.43		.59	-.11	.41	.25
・ 問題の洞察・把握	.30		.43	-.17	.37	.26
・ 気晴らし			.20		.20	
・ 对人的配慮	.22		.25	-.17	.39	.26
Locus of control尺度						
・ External	-.28		-.24		-.21	-.27
・ Internal	.16		.29	-.14	.41	
6因子マインドフルネス尺度						
・ 自他不二の姿勢	-.28		-.35	.13	-.40	-.15
・ 描写		.16	-.28	.32	-.27	-.09
・ 受容・自動的に反応しない	-.39	-.10	-.49		-.45	-.14
・ 客観的な観察	-.27		-.41	.23	-.41	-.22
・ 気づき	-.10	.13	-.30	.30	-.35	
・ 今ここに存在すること	-.39		-.52		-.40	-.21

Note. 無相関検定の結果, 5%水準で有意でなかった相関係数は省略した。

2

3

4

5

6